

2022年度（2022年7月1日～2023年6月30日）事業報告

□この1年

ラオス社会は、この2年以上続いたコロナ禍により経済が縮み、雇用が悪化しています。さらにウクライナ戦争の影響を受け、ガソリン価格をはじめとすすべての物価が上昇しています。一杯約15,000 kipだった麺が現在は安くて20,000kip、地方では2倍となっており、市民の生活は大変厳しい状況が続いています。ヴィエンチャンの街を歩いても、以前流行っていたレストランやホテルに閉鎖している店が多く見られ、車の通りも減少しているように感じられます。会がヴィエンチャン県で実施している奨学金事業で奨学金を受給している学生へのインタビューからも、家庭の経済状況が悪化していることが視えます。この世界的な経済の悪化はしばらく改善が難しいと考えます。とはいえ、21年末に開通した中国による鉄道は、ラオス人乗客も多く、観光を楽しむ層が確実に増えていることも事実で、社会の階層分化が進んでおり、この社会の現実を踏まえた「ラオスのこども」の活動が必要となっています。

・活動の課題、重点的取り組み

この数年、厳しい財務状況から、いかに運営を維持するか腐心する時期が続きました。この最優先課題に対し、様々な皆さまからのご支援に加え、支出削減などの努力により、おかげさまで今期末では財務状況を改善することができました。皆さまに感謝します。

この改善を優先させることもあり、2022年度から開始する予定であった第9次中期計画のとりまとめを一年間遅らせ、今年度は、理事により組織の将来像、運営展開における課題などについて、繰り返し話し合いました。その結果策定された第9次中期計画では、事業はこれまでの成果を継承する内容を発展させ、運営面では組織の世代交代をすすめ、ラオスではマネージメント力を高め、自律性を増進する方策を基本とするものとなっています。

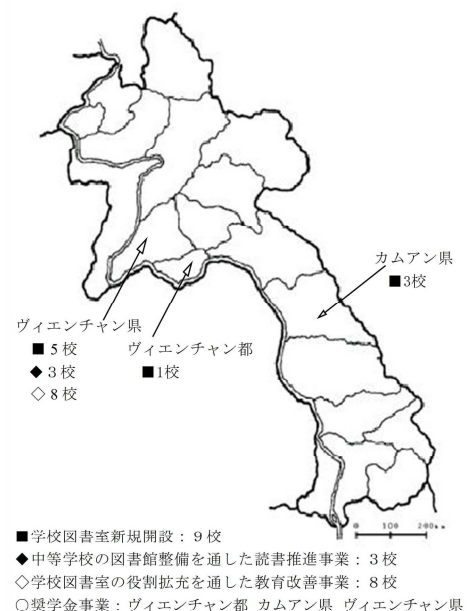
組織運営においては、日本人駐在員がラオス事務所にはほぼ10ヶ月ほど不在となったことから、東京、ラオス間で密なコミュニケーションを保つよう、定例会議を確実に開催し、事務所間でズレが生じないよう対応しました。また公的資金に頼らずとも、組織、事業運営ができるよう、資金調達、支援者確保の目的で、コロナ禍で中断されていた各種イベントや物販企画を再開し、さらに書き損じハガキ・切手収集キャンペーンに力を入れ、一定の成果とすることができました。ALC図書館の支援を目的とするクラウドファンด์にも多くのご支援をいただきました。賛助会員会費も税制優遇を得られるよう会員制度を改訂し、会員入会キャンペーンなどに取り組んでいます。この他ラオス事務所においては、国際協力機関・組織や私立学校に対して図書購入を働きかけ、さらに読書推進活動の事業受託の広報も積極的におこないました。

事業においては、「ラオス語図書出版・本を読む環境の整備」を基本として、各種事業を継続しました。さらに外務省の日本NGO連携無償資金協力事業「中等学校図書館整備を通じた読書推進事業」が2022年7月に終了した成果を引き継ぎ、2023年5月15日から3年間にわたるJICA草の根技術協力事業として「中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業」を開始しました。国内では、昨年引き続き、企業の皆さまの「ラオス語絵本プロジェクト」への参加が増えています。とはいえ、事務所スタッフの減少により、各種サービスで支援の皆さまには十分な対応が出来なかった面もあり、来年度での改善を目指します。

・成果

皆さまのご支援の結果、今年度は、ラオス語図書5種類12,800冊を現地で出版し、9か所で新規の学校図書室を開設することができました。今年度末までの累計ではラオス語図書 235種類 940,855冊（図書200/紙芝居19/教科書類6/ニュースター10）を出版し、ラオスの小中高校10,644校（小学校8,757校、中等学校1,836校）のうち、349カ所で図書室（うち16カ所は地域文庫）を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,328校でフォローをしました。また、これまで全国14カ所の子どもセンターの運営を支援し、活動の活性化を支援しています。

2022年度 事業対象地域図



プロジェクト

＜計画＞ 今期は、ラオスにおいて以下の活動をおこなう。

1. 子どもたちが読書に親しむ環境を整える「読書推進活動」
2. 子どもたちに良質な本を提供する「出版活動」

さらに日本では、ラオスでの実施事業を紹介すると共に自己資金の拡充のために、イベントの参加や実施、出前講座活動、ラオス語絵本プロジェクトなどを展開する。

I 読書推進活動

I-1 中等学校の図書館整備を通じた読書推進事業

＜計画＞ 2019年3月から実施してきた、ヴィエンチャン県ポンホン郡とヒンフープ郡の3カ所の中等学校での図書館整備を通じた読書推進事業を7月末に完了する。

＜実施＞

3年5ヶ月にわたり実施した事業は7月末に終了。事業開始時に設定した指標の達成は以下の通り。

指標(1-1) 各校において、研修で習得した図書館サインや展示が継続的に実行されており、研修で習得した内容が定着している。

指標(1-2) 一日あたりの平均図書館利用数（全校生徒数に対する割合）が、全ての学校で12%を上回り目標を達成した。（ポンサイ中等学校（以下中）：15.5%、サカ中：15.0%、ヒンフープ中：33.8%）

指標(1-3) 一日当たりの平均図書貸出者数（図書利用人数に対する割合）は、目標の25%を達成することができなかった。（ポンサイ中：7.3%、サカ中：5.9%、ヒンフープ中：4.2%）原因は、コロナ禍の学校閉鎖により、開館できる日が限られ、貸出を制限せざるを得なかったことが影響していると考えられる。また、生徒は図書を借りて家で読むより、学校の空き時間に図書館内で読む習慣がついていることも関係している。

指標(1-4) 研修をうけた教員のうち図書を授業で活用した人の割合は、ポンサイ中：75%、サカ中：26%、ヒンフープ中：100%であり、2校は目標の70%を達成した。達成できなかった学校は、コロナ禍で学校閉鎖期間が一番長く、研修の実施が遅れたため、実行期間が足りなかったことが影響している。

このような達成状況から、対象校では読書推進の図書館プログラムは、継続的に実施されるようになっていくといえる。

指標(2-1) 全ての学校で3カ月毎に図書館運営報告書を作成し、村教育開発委員会に提出している。

指標(2-2) 各校では、当会の若干のサポートは有りつつも、学校（校長、図書館担当教員）と村教育開発委員会で、運営状況のモニタリングを実施できるようになってきている。

指標(2-3) 各校で実施した最終モニタリングでは、学校と村教育委員会で、翌年度の図書館運営計画を策定し、学校独自の活動計画・予算計画を立てることができている。

このような達成状況から、村教育開発委員会と学校が協力し、自分達で学校図書館が運営されるようになっていく。

＜成果と課題＞

今回の事業では、郡教育スポーツ局のサポートのもとで、村教育開発委員会（VEDC）が学校と協力し、学校図書館運営を支えていく基盤を作ることが出来た。また、3カ月ごとの学校図書館運営報告書や年度ごとの学校図書館運営計画の策定を通じ、図書館担当教員が、次年度に購入したい新規図書をリストアップしたり、学校の状況を踏まえた独自の活動や予算計画を考えられるようになるなど、学校とVEDCがオーナーシップを持ち、自分たちの図書館のことを自ら運営していく習慣がついてきている。また、図書館担当教員どうしのSNSを活用したネットワークや交流大会を通じて、各学校の図書館担当教員が助け合える環境も生まれている。この事業の成果を生かし、図書館を基盤とする読書推進の展開モデルとして、ヴィエンチャン県に広げていく計画である。

【日本NGO連携無償資金協力事業】

I-2 中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業

＜計画＞ 先行事業での経験を活かし、内容を発展させた事業をヴィエンチャン県ムーン郡・サナカム郡で実施する。事業開始に向けて、ラオス政府了解（MoU）取り付け手続を進め、JICAとの契約準備をすすめる

<実施>

- ・ヴィエンチャン県ムーン郡とサナカム郡の中等学校8校において、先行事業を発展させた内容で、中等学校図書室を軸とした教育改善事業を展開する準備を進めた。
- ・事業開始に必要なラオス政府の了承(MoU)を2月15日に締結することができた。その後、JICAとの契約交渉をすすめ、5月15日から事業を開始となった。
- ・サブプロジェクトマネージャーとして、渡邊淳子を5月26日からラオスへ派遣した。
- ・6月8日には、「プロジェクトチーム会議」を実施。県・郡教育スポーツ局で構成されるプロジェクトチームを結成し、プロジェクトチームの役割や事業内容とゴールの共有をおこなった。

<成果と課題>

チームメンバーは、いずれも学校での教員経験があり、当事業の内容に関心を示し、先行事業で作成した「授業における図書活用アイデアシート」を閲覧して写真に撮るメンバーもいた。事業説明後、各自がチームメンバーとしてどんな役割を果たしたいかを紙に書き出し、各自が事業における自らの役割を具体的にイメージすることが出来た。

【JICA草の根技術協力事業（草の根パートナー型）】

I-3 学校図書室の整備

<計画> 小中学校の空き教室に本と本棚を提供し、図書室運営に関する教員研修をおこない、学校に図書室を整備することで、子どもたちが日常的に図書に接する機会をつくる活動を継続実施する。

<実施>

既設図書室に対するフォローアップ活動については、ヴィエンチャン都内の3か所の学校図書室について活動状況を調査し、その後フォローアップ研修を実施した。また、ルアンナムター県の20校に対し、オンラインでのフォローアップ研修を実施。また合計27校に対して、新しい図書のセットを配布した。

【ご支援：ベルマーク教育助成財団、指定募金】

新規開設は、以下の日程で9校に図書室を開設することができた。

【ヴィエンチャン県】

- 2022年9月23日 コーンケオ中等学校 (HA341) 福岡那の香ライズクラブ
- 2022年9月23日 ムアンキー中等学校 (HA342) *
- 2022年12月9日 67キロ文化学校 (HA345) *
- 2022年12月27日 ポンスーン小学校 (HA347) OKI愛の募金 (OKI volunteer fund)
- 2022年12月29日 エークサーン小学校 (HA348) * 高橋貴美子 上原芳子 安藤由紀子 平憲治

【ヴィエンチャン都】

- 2023年1月11日 ポーサイ中等学校 (HA346) EGAWA SHIZUE

【カムムアン県】

- 2023年2月23日 ムアンカイ中等学校 (HA343) * ニコングループ有志一同 佐藤敬三 春日部高等学校
- 2023年2月25日 シヴィライ中等学校 (HA344) * 岩名秀樹・寿美子
- 2023年2月28日 ナードーン中等学校 (HA349) OKI愛の募金 (OKI volunteer fund)

敬称略 * 書き損じハガキ持ち寄りキャンペーン2021-2022

HA=HakArn=当会が開設する図書室の愛称。ラオス語で愛読の意味

<成果と課題> 9校合わせて、4,300人を超える児童生徒先生たちが、図書を読むことが出来るようになった。特に、昨年の書き損じハガキキャンペーンは目標を上回る成果があり、2校の計画のところ5校で図書室を開設することができた。

I-4 学校図書室活用のための応用研修

<計画> これまでの実戦経験を活かし、中等学校の図書室を更に活用するための「図書室応用研修」を実施する。

<実施>

図書館がもっと活用されるように、図書館のサイン・展示と、授業での図書活用を促す「図書館応用研修」を、ヴィエンチャン都内の2校、ヴィエンチャン県内の3校で2022年10～11月に実施。今回の対象校はいずれも、当会が過去に図書室の開設支援をした学校であったが、参加した先生たちからは、あまり図書室を利用したことがないという声が多くあがっていた。そこで、ゲームを取り入れたオリエンテーションで図書室に慣れてもらい、それから図書活用の授業計画を立てる実習を行った。図書室担当の先生とボランティアの生徒が協働で取り組んだ図書館サイン・展示では、「展

示をすることで、生徒たちがもっと図書に興味を持つようになると思う（図書館担当教員）」、「自分でも展示をやってみて、利用者を増やしたい（ボランティア生徒）」との声が上がった。また、研修には、同じ郡の他の学校図書室の先生たちが、自主的に参加してくれた。

【ご支援：冬募金2021、特定非営利活動法人地球の木】

I-5 ALC図書室（ラオス事務所併設図書室）活動

<計画> 事務所併設図書室は、コロナ禍で活動を停止していたが、規制解除されつつある中で、活動を再活性化する。

<実施>

財政難によるラオス事務所併設図書室の移転と閉鎖を止めるために、クラウドファンディングを2022年9月8日～11月8日に実施し、121名の方から1,026,400円のご支援をいただいた。クラウドファンディングを通じて、支援者の皆さまからいただいた応援メッセージは、私たちが図書室をこの場で続けていくことの意味、意義について、あらためて考える機会にもなった。

図書室を維持発展させていくために、子ども達が快適に利用できるよう、看板やフェンスの塗り替え、床の補修、電気の付け替えなど、設備の修繕をおこなった。また、コロナで減少した来館者を呼び戻すため、スペシャルイベントを12月27日に開催した。また、これまで生徒は来ていたものの学校自体とはあまり連携していなかったため、近隣のサイセター中等学校を訪問し研修を実施した。

<成果と課題>

ラオスでも都市部では子どもたちの図書離れが見られ、ALC図書館が活性化するためには、施設環境の改善に加え、スタッフによる日常的な働きかけが必要と認識している。

【ご支援：クラウドファンディング2022秋】

II 出版プロジェクト

<計画> ・「文字・数字絵本」シリーズ4タイトル、環境教育絵本『ぼくはどこへいくの』紙芝居『これはジャックのたてたいえ』の再版をおこなう。市場を意識しつつ、在庫切れの図書の再版や、新刊図書の出版企画をすすめる。

<実施>

再版5作品の計12,800部を出版した。当会がこれまでに出版した図書・紙芝居は累計230点928,055部となった。

	作品名	作者名	出版数	主な支援者
1	文字絵本1『なんのどうぶつ?1巻』第7版	詩)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ケオ サイニャヴォン 他6名	3,000部	クラウドファンディング2022春、募金キャンペーン寄付者の皆様
2	文字絵本2『なんのどうぶつ?2巻』第7版	詩)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ケオ サイニャヴォン他6名	3,000部	
3	文字絵本3『お星さまきらきら』第3版	詩)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ドワンチャイ ペンマニヴォン他8名	2,500部	
4	数字絵本『くだものをかぞえよう1.2.3.』第2版	絵)マニヴォーン アートパースック	2,500部	
5	『ぼくはどこへいくの』第3版	絵)やべみつり 日本語文) 森透 ラオス語文) チャンタソン インタヴォン	1,800部	特定非営利活動法人地球の木、指定募金

・25年前の初版刊行以来、ラオスの子どもたちに親しまれてきた「文字絵本」「数字絵本」。「文字絵本」は再版の度に色が変わってしまい、「数字絵本」は絶版になっていた。そこで、初版の色合いを復元した再版を計画し昨年度から準備をすすめてきた。2022年6月に印刷を開始したが、『文字絵本3』『数字絵本』は一部で製本の不具合があり納品が今年度にずれ込んだが、4点計11,000冊の本が出来上がった。出版に合わせて、ラオス事務所スタッフの読み聞かせ動画も作成し、アップした。

・ラオスで身近なバナナと近年問題になっているビニール袋の物語を通して、子どもたちにラオスの自然の豊かさと、自然と共に営む暮らしの大切さを伝える、環境絵本『ぼくはどこへいくの』。長年ラオスの絵本・紙芝居の普及に携わってこられたやべみつりさんがイラストを手掛けたこの本は、2004年に初版、2012年に再版され、多くの子ども達に親しまれてきた。在庫切れとなったこの本をさらに多くのラオスの子どもたちに届けたいという声が挙がり、クラウドファンディング

(2022年2月17日～3月31日)と、特定非営利活動法人地球の木の支援を受け、新たに再販することとなった。今回は、やべさんが描かれた原画の世界観を忠実に再現出来るよう、原画を日本でスキャンし直し、ラオスで編集・印刷した。この絵本は、読み物として、環境教育、ゲームなど、様々な使い方をすることが出来ることことから、当会の事業活動はもちろんのこと、様々なNGOが実施している読書推進プロジェクトで活用される予定。

<成果と課題>

再版図書の出版については、質を上げることができたが、新刊については、新しい企画をおこない、出版に持っていくまでの余裕がなく実現しておらず、課題として残る。

Ⅲ 子どもセンタープロジェクト

<計画> ・全国での現在の活動などの把握を進めるが、活動支援は引き続き休止する。

<実施> 要望のあるセンターに対し、図書の配布をおこなった。

Ⅳ 奨学金事業

<計画> ・会独自の奨学金事業は、I-1の事業地であるヴィエンチャン県の3か所の中等学校にて、奨学金の給付を継続しておこなう。今後の展開について再検討する。

<実施>

タイのThe Siam Cement Public Co.Ltd. (SCG)より、2012年～2019年の8年間受託し、その後コロナにより休止されていた奨学金事業が、3年ぶりに復活し、再度受託することとなった。高校生(中等学校5年～7年生)が対象で、教育局と協力し、ヴィエンチャン都全域及びカムワン県4郡にあるすべての公立中学高校に願書を配布。書類選考をおこない、ヴィエンチャン都110人、カムワン県110名、計220名の奨学生を決定し、1年間の奨学金を2回に分けて提供した。

【タイ The Siam Cement Public Co. Ltd. より受託】

ヴィエンチャン県ボンホン郡ボンサイ中等学校、サカ中等学校、ヒンフープ郡ヒンフープ中等学校の3校にて奨学金事業を実施。同校で実施する事業が終了することをふまえ、新たな奨学生の募集は行わず、昨年度までの奨学生で在学中の3名の生徒に奨学金を給付した。3名とも2023年6月に学校を卒業した。

奨学金受給者にインタビューすると、どの生徒も、野菜を栽培し売ったり、織物を織って販売するなど、家計を助けるために働いている。男子はガソリンスタンドや夜警のバイト、女子は結婚式場などのイベントのバイトをする子も居る。特にガソリンの高騰は、通学にバイクやバスを使用しなければならない子どもたちの通学にも大きな影響が出ており、ガソリンを入手できなかつたりバス代が支払えないために、学校を欠席しなければならない日があるとのことだった。

<成果と課題>

不況により生徒たちを取り巻く環境が悪化し、奨学金のニーズが高まっている。規模の拡大と、支給額の増加を現地から求められており、来期で対応をおこないたい。

【ご支援：マンスリーサポーター】

Ⅴ 国内事業

V-1 各種イベント

<計画> 資金調達や新たな支援者の開拓を目的とし、イベント参加や開催を効果的に実施。企業との連携も継続する。

<実施>

恒例のピーマイパーティは、着席形式から立食形式にもどし、バーシーの儀式も実施する形で開催できた。例年実施している東京谷中の「エスノースギャラリー」や、京都哲学の道の「桜谷町47」での展示販売会も、開催することができた。また今年度は、各地のボランティアの協力により、地域でのイベントに出展し、活動紹介や物品販売をおこなうことができた。

以下のようなイベントを開催、出展した。

7/1-7/31	カフェ&ダイニング素々 委託販売(9-11月、1月、5-6月にも実施)
8/13-9/12	京都恵文社ブックフェア 開催
11/5	おおいたワールドフェスタ(物品販売協力)
11/5-6	つくばラオス祭り 出展
11/6	東広島国際フェスタ(物品販売協力)

12/10-25	the ETHNORTH GALLERYラオスの手仕事vol.9～手から手に伝わる技術～ 開催
3/29-4/4	京都織物展 開催
4/23	ピーマイパーティ2023 開催
2/4	ハートカフェ～ぶらり地球さんぽ～ 出展
5/27-28	ラオスフェスティバル 出展

<成果と課題>

コロナ禍が収まりつつあることから、物販イベントやピーマイパーティなどを再開できた。物販収入はコロナ禍以前までには戻っていないが、回復基調にある。委託販売も増加している。

V-2 出前講座活動

<計画> 学校などを訪問して実施する「出前講座」「講師派遣」を、オンラインを含めて継続して実施する。

<実施>

今年度は以下の学校やプログラムに講師派遣をおこない、ラオスや国際協力、当会の活動への理解を促進することができた。大学はオンラインでラオス事務所や学校と繋いで実施した。

7/16	町田市立真光寺中学校 講師派遣
11/5	「SDGsよこはまCITY 秋」NPO法人地球の木のプログラムで講演(オンライン)
2/24	愛知県立常滑高等学校へ活動説明(オンライン)
3/13	埼玉県立春日部高等学校へ図書室開設報告
5/29	学習院女子大学 講義(全5回実施)

<成果と課題>

オンラインで東京・ラオスの事務所とむすび、出前講座を実施することが一般化している。参加者が国際協力を身近なものとなるように、工夫を重ねる必要がある。

V-3 ラオス語絵本プロジェクト

<計画> 支援者の拡大及び開発教育として、個人に加え、企業・学校・団体との連携を継続して実施する。

<実施>

今年度のプログラム申込者は84件で、合計1,840冊の絵本が作成され、昨年度と件数は変わらないものの図書は約500冊増加した。沖電気工業株式会社、株式会社ニコンの絵本作りイベントは引き続き在宅での実施で参加者が増え、完成する絵本も増加した。また日本フィランソロピー協会のボランティアウェブを通して、個人での新規に参加する人も多く、また中には継続的な参加者もいる。しかしラオスへ送る船便が引き受けを休止しており、ラオスへの輸送なかなか出来ずにいる。

<成果と課題>

絵本プロジェクト参加者が増加している。この参加いただいた方が、継続的な活動支援者になっていただけるよう、チラシなどを整備しているが、働きかけなどで難しさがある。翻訳絵本リストの改訂を今年度も実施することが出来ず、課題として残る。

V-4 書き損じハガキの収集

<計画> 資金調達及び支援者拡大として、今年もキャンペーンを実施し、個人・企業・学校・団体からの協力を募る

<実施>

今期もインターンがチームに参加し「書き損じはがき・未使用切手回収キャンペーン」第2弾を実施。開始当初は苦戦したものの、毎日新聞、熊本日日新聞、東京新聞、読売新聞(掲載順)に記事を掲載していただき、期間を延長するなどして、2022年11月～2023年3月で508件、葉書16,206枚、切手121万300円相当、総額205万5,000円相当の支援をいただき、目標を大きく上回る事ができた。

<成果と課題>

ニューズレターの配送時に返信用封筒を加えることで、キャンペーン以外の時期も葉書や切手の寄付をいただくことが増えている。

会の運営

<計画> 日本では、目的、対象と成果を明確にした広報活動を強化し、より多くの方々からのご支援を厚くする。ラオスでは、読書推進や図書出版の分野において、国際協力機関との連携を強め、活動を広めつつ資金調達をすすめる。

VI 理事会

<計画> ・経営、資金調達などの状況を把握し、プロジェクト進捗や成果の確認により、運営を管理し運営方針を決定。

- ・第8次中期計画を振り返り、今後の活動の方向性を定めるため理事懇談会を開催し、第9次中期計画を策定する。
- ・設定された明確な目標のもと使命達成のために資源を集中させる。

<実施>

今期の運営責任は以下の理事・監事によって担われた。

理事	・塩谷 光	・新藤 雅章
	・チャントソン インタヴォン	・西村 恵子
	・野口 朝夫	・森 透
監事	・脇田 康司	・矢崎 芽生
アドバイザー	・小林 毅	
顧問	・長野 ヒデ子	・やべ みつりのり

理事会を4回開催した。オンラインでの参加も含め延べ27名の参加となった。財政状況の確認、資金、運営状況、プロジェクト準備についての報告のほか、中期計画策定状況の報告などがおこなわれた。さらに今後の当会の運営をどのように展望するか、JICAに申請する事業内容の確認などが話し合われた。

第1回 9/3 7名出席(うちオンライン出席3名)

主なテーマ:日本NGO連携無償資金協力事業の進捗状況、JICA草の根技術協力事業申請状況報告第21期修正事業計画案・予算案の討議と承認、第20期事業報告案・決算報告案の承認、監査報告承認、賛助会員に関する定款変更について討議

第2回 1/28 7名出席(うちオンライン出席2名、書面表決2名)

主なテーマ:経営状況と財務状況概要、ラオス政府との活動覚書(MoU)、JICA草根の技術協力事業準備、カレンダー販売報告、通信・年次報告発状況、書き損じハガキキャンペーン、冬募金、東京都への定款変更届報告

第3回 3/4 6名出席(うちオンライン出席2名)

主なテーマ:経営状況と財務状況概要報告、冬募金、書き損じハガキキャンペーン報告、JICA草根の技術協力事業準備状況報告、第9次中期計画案話し合い

第4回 6/25 7名出席(うち書面表決2名)

主なテーマ:財務状況、JICA草根の技術協力事業状況報告、第22期事業計画・予算案の承認、理事候補選任、アドバイザー契約の承認、第9次中期計画案の解説と討議

(上記は、理事 監事の出席人数を含む。その他、アドバイザー、スタッフが参加している)

この他、理事有志により「ラオスのこども」の活動の将来を考え、中期計画案を策定する「理事懇談会」を4回開催し、第9次中期計画の方向性を定めた。

総会

<実施>

9月17日、2022年度通常総会を活動会員42名(オンライン参加者14名、書面表決者8名、委任状8名を含む)、活動協力者3名、計45名が参加し開催した。2021年度第20期の事業報告案及び決算報告案に関する事項が承認され、2022年度第21期の事業計画書、予算案について報告された。第2部は「成長する図書館-スタッフの挑戦、学校の熱意」というテーマで、ラオスから帰国した駐在スタッフ渡邊淳子による活動報告がおこなわれた。

VII 東京事務所 組織運営

<計画> ・リモートワークと事務所での勤務を併用。会計の専門性のあるボランティアに業務の一端を担ってもらおう。

<実施> 以下の3名で運営を担当した。

野口朝夫	常勤非専従事務局長	1992年1月入職
赤井朱子	スタッフ	1995年4月入職
渡邊淳子	業務委託	2019年4月入職 2023年5月よりラオス駐在
小林毅	アドバイザー	2016年4月から

業務はリモートと事務所での勤務を併用しながらおこなった。

財政立て直しのためスタッフを増員せずに業務をすすめたが、インターンが書き損じキャンペーン

などで、大変力を発揮してくれた。さらに専門性のあるボランティアが会計や翻訳業務などで業務の一端を担ってくれた。

VII-1 事業運営

<計画> ・事業成果の継続と発展を重視しつつ、今後の展望を意識した運営をおこなう。

・読書推進の専門家・活動家と連携し、事業展望を確かなものとし、運営の質を高める。

<実施>

日本NGO連携無償資金協力事業において終了時に開催した現地での事業評価会議で、活動に対して高い評価が得られたことが、5月に開始したJICA草の根技術協力事業に対し、行政機関や村人の理解、関心が高まることに繋がり、実施体制を整え易かった。新事業開始までの10か月で、専門家からのアドバイス、現地での調整などの準備を行えた。

・事業成果の継続と発展を重視しつつプロジェクトを着実に実施した。変化する現場の状況把握を深めるために、現場のモニタリングを実施し、ニュースレターなどで特集として報告した。

・出版や図書館、保育の専門家と連携することで、プロジェクト運営の質を高いものとしてできている。

VII-2 組織運営

<計画> ・賛助会員の特典条件を再検討し、会費が税制控除を受けられるようにする。

・東京・ラオス両事務所の情報共有が確実となるよう、定期的なオンライン会議を実施する。

<実施>

・支援者の増加により運営の安定度を高められることから、賛助会員制度から対価性を無くし、会費が税制優遇を得られるよう東京都への手続が完了した。

・3年5ヶ月にわたり実施してきた外務省日本NGO連携無償資金協力事業が7月に終了し、ラオス事務所日本人駐在員の帰国にともなうラオス事務所との情報共有の減少が懸念されたが、両事務所合同ミーティングを定期的にオンラインで開催することで共有がおこなわれた。

・年次計画の評価と次年度計画策定も両事務所が参加し実施した。

・現地政府との活動覚書(MoU)取得も今回は、役所に対する働きかけを頻繁におこなうことで、比較的順調に進めることができた。

<成果と課題>

体制に余裕がない中、計画された活動は概ね実施することが出来た。東京、ラオス事務所間のコミュニケーションは徐々に改善されているが、より高める必要がある。

VII-3 資金調達・広報

<計画> ・国内での認知度を高めるためのメディアへの働きかけをすすめる。・新規支援者の増加に向けた戦略を作る。

・ラオスでの、国際協力関連組織への広報活動を重視する。・ラオス語図書の販売を拡充する。

・カレンダーの制作販売、書き損じはがき回収キャンペーン、冬募金を着実に実施する。

<実施>

・対象を意識し、寄付メニューチラシを改訂し広報に利用した。

・賛助会員会費が税制優遇を受けられるようになったことで、会員拡充キャンペーンを実施した。

・人的な制限から、前年度より回数は減少したものの、読者層に応じてニュースレター、年次報告書、ホームページ、SNSなどのコミュニケーションツールで発信活動を継続した。

✓ ホームページ記事発信	: 17回	(前年度: 33回)	
✓ ブログ記事投稿	: 7回	(前年度: 7回)	
✓ フェイスブック記事投稿	: 63回	(前年度: 94回)	
✓ フェイスブックフォロワー	: 1,537人	(前年度: 1,423人)	※期末時点
✓ インスタグラム記事投稿	: 16件	(前年度: 29件)	
✓ ツイッター記事投稿	: 13件	(前年度: 17件)	
✓ 新聞記事掲載	: 6回	(前年度: 6回)	

・紙媒体では「ラオスのこども通信」を以下の通り年3回 計4,00部発行した。

83号 (8月発行) 特集「中等学校の図書館に新しい展開」

84号 (12月発行) 特集「ラオスの今、子どもたちの暮らし」

85号 (6月発行) 特集「図書室が学校にあるということ」

年次報告書は12月に500部発行。奨学金を支援するマンスリーサポーター向けに「マンスリーサポーター通信」を8月と3月に発行した。

- ・メディア掲載では、書き損じキャンペーンについての働きかけを積極的におこなった結果、年間で6社で記事が掲載され、寄付者、支援者の増加に繋がった。
- ・テーマを定め呼び掛ける特別募金は、以下のように実施した。
 - ✓12月～3月：冬募金『リズムで学ぶラオス語』出版募金として実施。募金額合計353,800円
 - ✓1月～：「賛助会員」会員入会キャンペーン
- ・クラウドファンディングで「子どもたちを育む場を守りたい！」ラオス事務所併設図書館の存続のご支援を」を実施、121名のから1,002,400円の支援をいただくことができた。
- ・「アプーの詩 子どもたちがみた風景」と題するオリジナルカレンダーを1500部製作。約1200部を販売し、862,411円の売上となった。
- ・長年の懸案であるホームページのリニューアル準備を進めている。また、英文対応での寄付を受けられるように改善すると共に、英文化した通信の特集記事を、広報ツールとしてホームページにて公開した。事業別英文レポートはまとめられなかった。
- ・「書き損じハガキ収集キャンペーン」協力者や「ラオス語絵本プロジェクト」参加者へ継続的な支援の働きかけをおこない、メディアの掲載もあり、成果を上げた。
- ・遺贈・相続財産の寄付チラシを8月に通信とともに発送した。
- ・BASEショップは更新頻度を頻繁に出来ず、なかなか売上が伸びていない。

<成果と課題>

財務改善のため資金調達に組織として集中的に取り組み、ある程度の成果を上げることが出来た。とりわけ昨年度に続き、書き損じキャンペーンがメディアで取り上げられたことで、それまで情報を届けることが出来なかった方々への接点ができ、支援者となってくださる方もいる。インターン、ボランティアの協力もあり、各種発信活動もおこなうことが出来た。ただし限られた体制で、どのアプローチを強化、工夫すべきか検証が必要である。

ラオス国外に居住するラオス人からの寄付申し入れに対し、これまで受入口座の制限がら、対応が出来なかった。クレジットカードの英文寄付ページの整備により、受入が可能となった。英文でのまとまった活動情報をより整備する必要がある。

VII-4 人材育成

<計画>・専門家とアドバイザーの指導と協力を受けつつ、組織運営や事業運営の各領域でスタッフの実務研修を重ねる。

<実施>

昨年に続き、専門家の現場派遣が困難であったことから、ラオスでのセミナー開催や事業アドバイスはオンラインによった。スタッフは進行をモニターし、専門家の研修を共有することができた。

「書き損じハガキキャンペーン」においては、引き続きアドバイザーの主導の指導を受けることで成果を上げることができた。

<成果と課題>

組織活動の発展のためには、ファンドレイジングや広報に関わる人材の育成、プロジェクト運営のためには、読書推進活動にかかわる人材の専門性の育成が必要となっている。

VII-5 活動ミーティング・勉強会

<計画> 定期的な開催を休止する代わりに、活動報告会などの開催を企画する。

<実施>

9月17日に、駐在スタッフにより帰国活動報告会をおこなった。

VII-6 ネットワーク

<計画>・国際協力NGOセンター（JANIC）、教育協力NGOネットワーク（JNNE）のネットワークを維持する。

<実施> 国際協力NGOセンター（JANIC）正会員、教育協力NGOネットワーク（JNNE）会員を今年度も継続し、森透理事がJNNE代表を務めた。また、4月のピーマイパーティの会場においてJNNEの「SDG4教育キャンペーン」の企画に協力した。

学習院女子大学の国際協力を学ぶ授業に協力し、ラオス事務所や事業地の学校とオンラインで結んだり、講師として参加するなどにより、若い世代に国際協力の現場を伝えることができた。

VII-7 インターン・ボランティア

<計画> ・開発教育の一環としてインターン・ボランティアを受け入れる。・会計など専門ボランティアを募集する。

<実施>

インターンは継続で2名（矢野みなみさん、松田羽純さん）新規1名（佐々木美咲さん）計3名が事務所業務をサポートしてくれた。例年通り、会計の専門ボランティア（風間美苗さん、福島孝好さん）が、会計業務を担ってくださった。

<成果と課題>

スタッフが在宅で勤務をおこなうことも多く、インターンの受入日が限られた。一方、書き損じキャンペーンや絵本プロジェクトで、インターンの役割は大きく、大いに貢献してくれている。業務担当をより明確にし、専門性を高められるように受入側として、整備する必要がある。

VIII ラオス事務所 組織運営

以下の体制で運営を担当した。

スラピー	ラオス事務所所長	2011年7月から事務所所長	2006年1月入職
チャンシー	事務所図書室、図書在庫管理		1998年8月入職
バンロップ	読書推進事業、図書委託販売		2013年7月入職
スパポーン	総務、会計、読書推進事業補助		2014年12月入職
ダラー	顧問		

VIII-1 事業運営

<計画> ・「読書推進」「出版」の事業を着実に実施する。

・ JICA事業実施の前提となるラオス政府との覚書MoU形成を遅滞なくすすめる。

<実施>

- ・「中等学校の図書館整備を通じた読書推進事業」は、コロナ禍でスケジュールの変更・延期により、やむをなく当初の予定を半年延長したものの、2022年7月に完了することができた。
- ・「中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業」はMoUの締結に向けて準備をすすめ、2023年5月に事業を開始した。
- ・「学校図書室（ハックアーン）の整備」「出版事業」「奨学金事業」は遅れがあったものの、ほぼ計画通りに進めることができている

<成果と課題>

コスト削減によりギリギリの体制の中で、スタッフは事業を担い貢献的な働きを続けてくれた。これまでの事業実施で経験を積み、ラオス事務所スタッフは会議、セミナーなどで、ある程度イニシアチブをもってリードすることが出来るようになってきている。

VIII-2 組織運営

<計画> ・優先順位を意識した事業実施を組み立て、実施。・事業を振り返り、事業計画案と予算案を策定する。

・東京ラオス両事務所間で会議を定期的実施し、状況の共有と困難の解決を遅滞なくおこなう。

<実施>

「中等学校の図書館整備を通じた読書推進事業」の完了の遅れにともない、業務スケジュールの変更調整が続き、計画されていた事業報告や業務管理体制の整備などは十分にはおこなえなかった。ラオス事務所内でのミーティングは毎週、両事務所合同ミーティングは1～2か月に1回開催され、事業進捗状況などの共有がおこなわれるようになった。年度末の事業・組織評価では、ラオススタッフから、状況を見据えた建設的な意見も出るようになってきている、一方で総合的には、日本人側からのファシリテートやフォローがないと難しい状況も続いている。

月次会計報告は定期的に所長より提出されているが、提出が遅れがちになる。

<成果と課題>

定期的なスタッフミーティングを繰り返すことにより、ある程度事業全体を見通すことが出来、建設的な発言も多くなっている。一方、事業単位を超えた将来的な課題の意識、状況判断などには未だ充分でない。また、各種報告作業も遅れがちであり、改善が必要である。

合同ミーティングにより相互の意思疎通はかなり改善されてきており、NGOスタッフの意義、役割について理解を深めている。

ラオスの諸法規をふまえた上で、コンプライアンスの意識を高め、ルールに基づく運営が実施されるように改善が必要である。

VIII-3 資金調達

- <計画> ・ 図書販売 ・ 活動資金の調達手段として積極的に取り組み、新しい販売ルートを広げる。
・ 受託事業 ・ 国際機関、国際協力NGOからの図書セット制作、読書推進研修などの事業受託をおこなう。
・ 新規事業 ・ 自己資金拡充のため、ラオス国内の企業や団体へむけた募金パッケージを企画し売り込む。

<実施>

【図書の販売】

- ・ 昨年度から導入したフォーマットを用い、顧客別に月次の売上を把握出来ている。
- ・ ラオスでの図書販売売り上げ目標値110万円のところ、コロナ後に活動を再開した団体が増えたためか、約170万円の売上となった。国際NGO（World Vision, Child Fund Lao, Action Education等）からの大口の発注があったことで売り上げに貢献している。

【受託事業】

ラオスで活動する国際機関（ENFANT D'ASIE PROJECT 等）から、図書購入や研修提供を受託した。

【新規事業】

ラオス国内の企業や団体へむけた募金パッケージは、実行する時間的・人間的な余裕がなかった。

<成果と課題>

会が持つ読書推進活動ノウハウをより生かし、ラオスの子どもたちが読書の機会を得られるよう、国際協力団体からの事業委託を広げる必要があるが、加えて現場事業のみに留まらず、より広い視点をもつことで、大きな枠組の構築にも団体として参加できる能力を育てる必要がある。

VIII-4 人材育成

- <計画> ・ 図書館や出版に関し、専門家のアドバイスを受けながら実務研修をおこなう。

<実施>

11月に実施した「授業における図書活用研修」では、日本からオンラインで参加した下田専門家のアドバイスを受けながら、スタッフがファシリテーターとしてワークショップを実施した。

・ 数年前から計画されていた、タイでの学校図書館の活動事例視察は、コロナの影響により実施には至っていない。タイ東北部ブンカン県で実施の地域の物語から絵本を制作するプロジェクトの研修に参加できることになり、2023年7月初めにスタッフ3名が参加した。

VIII-5 広報

- <計画> ・ SNSを用い活動やラオスの教育事情に関する情報発信を継続し、日本及びラオス社会での認知度を高める。

<実施>

ラオス事務所のフェイスブックページは、1年間で44回の記事を投稿し、積極的に活動紹介や出版本の宣伝をした。

VIII-6 ネットワーク

- <計画> ・ 国際協力NGO（INGO）、日系NGO（JANM）との連携を維持するとともに、ラオスのNGOの中で当会の認知を広める。

<実施>

国際協力NGO内では、WhatsAppグループで日々の情報交換を行っている。日系NGOとの連携は、コロナ禍以降、日本人駐在員どうしの情報交換をより密におこなっている。

VIII-7 インターン・ボランティア

- <計画> ・ 社会開発やNGOへの理解を深めるため、インターンやボランティアを受け入れる。

<実施> 2023年2月に、東京事務所でもインターンをした岡田龍之介さんを受入れた。

VIII-8 訪問受入れ・イベント参加

<実施> コロナ禍の様子をふまえて、この1年、以下のような受入やイベント実施をおこなった。

8/30	横浜国立大学学生サークルFUN 訪問
11/9-13	ブックフェスティバル出展(ヴィエンチャンセンター)
11/25-27	CSO National Fair 出展(VTE都文化会館)
2/15	MoU署名式
2/16-17	愛知県立大学スタディツアー受入
3/8-12	ブックフェア出店(ラオス国立大学)
5/15-17	Reading Elephant Laos研修